繪本拾遺信長記

へ13
3564
14

門 ヘ 13
號 3564
卷 14

稲田大學図書館
昭 34.6.3 受
藏 書

世人信所謂道學先生云
畫工家者流以丹青爭西山
水花鳥徒是閑伎倆耳豈
識罔書相須自古已爾何
況則丹青手觸狀文字所

不能狀以使人咀嚼涵泳
而盡其蘊焉非少青手
之效哉尼聖也有言曰雖小道
必有可觀主焉信夫一日一友
人袖野無為叅來請余弁
言展而閱之刈某子以編

記織田氏與本願寺僧徒
交戰之事西王添光高四
以生鬪爭之狀戰陣之法
勝敗之勢歷然在目余乃
四野無稱官性之戎正史
之遺漏加有丹青手副

之以使覽者意想當時
之形勢焉此前余所云之
者亡不外此矣乃摭子言以
爲序云爾甲子孟春念
八日　滯高園島樗選謹

貴重書
樗選

織田拾遺信長記後編總目録

巻之一

児玉村上与名之事

毛利家私の孫の高名

村上八郎左衛門義本勝を破て大紅を奪ふ

児玉内義允伐尾上松事

石山の伏兵宅間が勝を討崩る

上人毛利の軍勢を蒙し給ふ

児玉内義允播州与砂より

児玉内義允作本を伐

阿波の鳴戸雜説
六字名号奇特之事
児玉内義兄義之應じて世を辭じ
毛利家之使者
大内尼子合戰
陶晴賢を者共滅じ

卷之二

勝家盛政討一揆事
山國一揆の注進安土へ來る
勝家盛政一揆を討
小田の渚の石山を奪る 二条
小田の士石山を攻る事
小谷茶勇戰
重臣繪書令叛松永事
月圓
貝塚の門徒名坂を
雜賀衆口合戰
信長根來寺の逆と放火
堀尾中村名石山勢と戰ふ

卷之三

松永弾正謀叛之事
信長村井を命じて松永が人質を取籠る
細川与七郎兄弟先陣
羽柴秀吉松永が密使を捕ふ
松永久秀滅亡之事
秀吉が軍兵石山勢を伐て信貴の城中へ
信貴山落城
松永真徳の先祖
信長需和本願寺事
信長石山表評定

中将信忠卿摂州發向
本願寺評定
荒木矢部両士石山城を別る

巻之四

雲霧感奇瑞事
同
同
秀吉攻摂州平定
秀吉請石山討手事
同
雲霧病の那沢

重幸再感奇異幸

秀の吉戦書を重幸より送る

重幸出陣之事

秀の吉長川より出陣

重幸討死を究めて後の遺言

重幸和歌を詠ず

巻之五

秀の吉与重幸戦小清水事

根来の小密茶臼戦　二条

羽柴殿本小清水の対戦

重幸布八陣戦秀の吉事

猪子兵助羽柴が陣へ使ず

秀の吉張歌方の疑討を恥ず

秀の吉重幸問答

重幸八陣と布て秀の吉を囲む

竹中半兵衛八陣を破る

小密茶討死之事

月図

本村又兵小密茶と討

巻之六

英名永洗浪川事

両下間重臣之陣場をとる

重臣大之歓を破る

重臣堀尾と戦ふ

中村信忠御陣ろ事

重臣へみ

秀吉小密策ぐ首を実信之捕へ

小牧郷強勢ろ事

水孫をへて重臣ぐ屍を探る

小牧村周章

百姓之九郎画解ろ高名事

百姓之九郎権兵衛ぐ宅と何へ

之九郎画解ろる名

村井長門守如て百姓名紀明ル

巻之七

玲本孫市志摩与兵衛陣参ろ事

玲本志摩石山退城 二条

重臣遂謀破信長事

信長石山を責む 二条

門後の男女幸山を脱ふ

勅使到石山事

信長若江の城へ放火

信長畿内

敵如上人英智を事

勅使石山へ到る

敵如上人開城

巻之八

ト宗般上人事

信長雑賀ノ宮ノ滝へ上人を捜し

敵如上人南紀へ開き給ふ

信長晴れ嘉上人事

下間頼廉雑賀武士と戦ふ

雑賀武士ノ上人を追入

石山開城之事

定専坊雑賀

鷺の森御坊門徒の男女素勒の図

明智光秀の係頼之事

石山開城

敵如上人播州下向

石山焼失

巻之九

長秀り躋る森を責事

丹羽長秀堺へ勢揃へ

躋る乃森辛ゝ落城

躋る森合戦之事

小田勢躋る乃森ゝ押寄る

躋るの森合戦稲本孫六勇力

躋る森寄手解囲級之事

小田方石吉乃死

上人御美報ゝ御脇乞

小田勢強勢

孫六踊乃事

巻之十

羽柴筑前守因幡平定事

秀吉中国征伐

数如上人姫路へ化益

西六條本願寺造立之事

本下寺仏教如上人と躋るの森ゝ別る

渚門徒多秀吉乃後詰

秀吉山崎ゝ光秀を誅伐

東六條本願寺造立の事
上人より佛照寺へ御入駕
西馬御見舞
上人遠国へ事
光秀が使者本願寺へ到る
本願の源山より巨材を伐出し
戸源の源太腕力
東六條本願寺山造営土砂を運ん
惣同盟絶

同盟
児玉村上の名の事
毛利家祖の源の高名
村上八郎左衛門義忠破て出船と集ん
児玉内義元代尾上松事
石山の伏兵毛利が勢と討崩し
上人毛利の軍勢実〻為ん

児玉内蕊允播州るゝより到る
児玉内蕊允神本を伐る
河波の鳴戸雄風
六家名号寿特之事
児玉内蕊允義を慮して降に
毛利家之使来
大内瓦る合戦
陶晴賢を若狭に殺に

繪本拾遺信長記後篇卷之一

児玉村上高名事

家より毛利家の隊将児玉内蕊允い大力強勇の曲者なれ共沢
山の軍勢よりく猛き壮士なるゆへ永松より元春り手地と駆る
おゝく歓永松と追ひ出し寡兵なれ斬殺〳〵歓を討り数を
知らず小田方乃将より間端七又三玄湯大宅丸〳〵入る大永松
折節り味方と下知してみるゝ歓の剛勇なるゆ猛勇て
南とさして引多不紙内蕊允なるゆ小見くゝ出大永松と案元て
今日の為名の魁さんと大軍より下知しく擂物をもめ
自ら二つ丸迄〳〵換地乃因ひときろ矢沢と見合せ打殺と
ならやまさ沢七又三玄湯が只中へ打つ〳〵ぬき海中へぶいとうち

毛利家
船手の
陽動
部隊

蔵人丹羽氏次うかゝしと矢乃ごとく船を漕付彼大毛
丸より飛乗りて八面より切入れば彼兵多武い討亡武い海中へ
飛入り〻〻溺死し雖乍大毛丸と乗込い同さまし加し働きかう度
尾ケ浦の蓋本ら兵百人余り大毛丸より大船へとろ
乗り尾右の船深に弓鉄砲をひ〻とり〻べ勝へ乗こう毛利勢の軍
船の中去一方へ押一通り近付兵船とどらり〻と打立く海路を
開きて〻尾ケ浦の方へ引行るい歯をかゝくそ見へ〻り毛利の船へ村
上八郎尾張門乗廣見と見へく物〻しき級兵どもが引立中う乗其
船乗込へる者に鉄へんと小船の中へ十余人の横矢と立
物せや者ども急げや船へと浪を切て押寄う船大船へ乗うんなく
漕付〻〻〻〻船へとれて船へ打上け飛乗へんし乗る者と尾ケ浦の

勢の中へ中路孫九郎と云う者左うまく船の柄を丁ど
切〻り断しもたまゝび村上い舟の方へ船へどうと落こう前
矢三宝仕換せしと乗をふるふく矢をうさくと踏でと
ひと〻〻ん乱入る船誰が打出れども知〻ぬ孫九郎一つ飛
乗門て再び村上と船中へ打側し〻う孫九郎見を見て
村上が船へ飛のり前と矢んとうけより亡と村上がいと例
記く兵一刀へ孫九郎を切側し勢ひへ乗ふく歩の大船へ
乗うう稲妻のひらめくごとく飛ぬく切立ては尾ケ崎
勢狼狽騒ぎ逃んとなせれども乗る人れが歩乃小船へ飛乗
て其所にく討る者もあり心〻び海中へ飛入て渡ぬ
流〻ぬ逃もなり村上一人ゞ力をて此大船一艘い暫時の間へ

村上八郎左衛門荒木勢と破て大に敗北と棄ハ

野より来り惣勢に住吉天王寺塙田猿猴に備へたる小田
方の附城より出合戦のはじまりしを聞つけ加勢して追散さ
んとせしくに延出たりしにて鈴木重幸が計略を以て給
設けたる石山方の砦々木津楼岸を始めとし諸方の軍
兵途中によこぎり小田勢を遮りとゞめさんぐに戦ひける中
にも下間が進れ織多が浅の如くに数百挺の鉄炮をかまへ
多く間が勢の中ゐるを不人皆先を並べ一同に喉をうちたてば
手負死人百人斗諸人乱きつて動顛せる所下間勢囲を絶て
縦横に切立てば多く間が軍兵大半討れさんぐになりて
天王寺へ引入ば其外塙田猿猴の軍勢も伏兵の為に討
崩され諸方の援兵一手も川口砦をたすくる事能ねば川口

の戦ひ弥小田方敗軍し真鍋七五三兵衛沼野将内宮浅並左
ま中務弥九郎が輩名ある勇士数多討死し惣軍粉の如
く討なされ八方に散乱し殺てとゞめる者もなし寔に拇ひさ
石山毛利の両勢数万人兵粮船を川口へ引入城中より牛
馬のたぐひに積せて夜の中悉く城内に運入勇を鋭る
かぎりなし顕如上人即毛利の大将飯田瓢中守児玉村上
をはじめ旗頭の者を招き城中に饗し給ひさまぐく饗応
なし給ひけるはめでたかりける次第なり

児玉内蔵允伐尾上松事

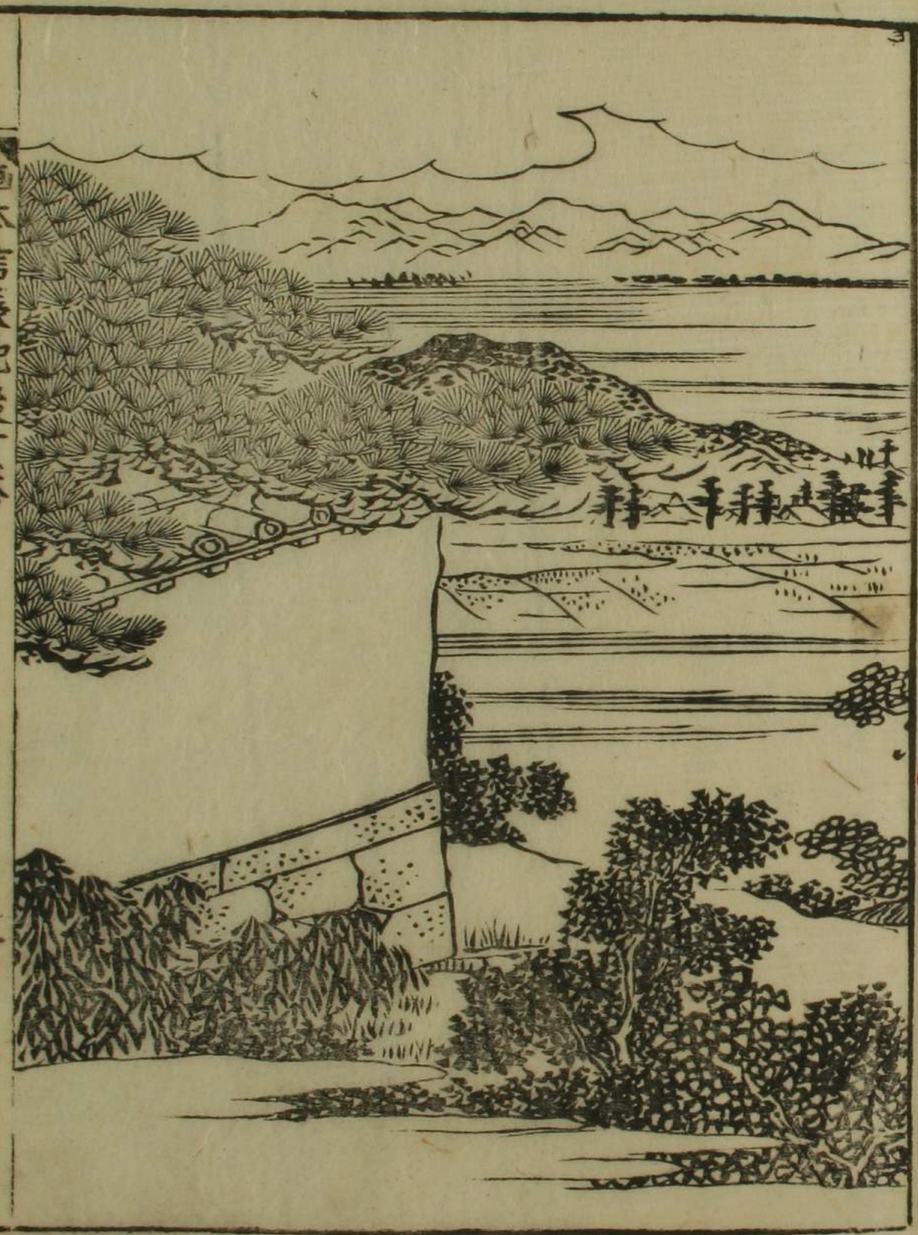
扨其暦方毛利の三使上人に暇を告帰国せんと議に
及ばずんば上人三人の使を廣書院に請し給ひ正使飯田

石山乃
仏兵
宅間
勢と
出ん
為を

上人光秀の
軍物語

城中より向ひ宮ふ中うい奉来信長程不無之軍馬をさし向け
強孔せ〜むるをんて心るゝ〜ぶ防ぎ戦ふとゝ〜ぐも元来國郡
と奉ふ武家の合戦より〜ぶしが兵粮の給べきうぐしう
ぶ城中の門徒名国衆より兵粮と送り場
る条何らの歎びう見より如ん〜〜ふ酒肴と設け郷食意
色浴ひくれば三度も合戦の勝利を祝〜歎て御陣中
川分にう義軍州さして急ぎる其中より兄弟門義
九れを人乃不用と通ふしが播州るかより私とゝぐり出る
三日滞留して国用を調へ国より及びんとせしが其日風荒
く小雨うう〜出私色ぐしとゝふ遁留してみるるが雨の
後猶若年の者ふう城方のるの狂行を人るどゝひぐ〜ぶる

我弓筆を捨て馬の内より往来し武功をんて人より劣らじとゝ
ぐも徳より毛利家の歩ねるより高名と天下に振ふる雄い
ぶ行〜ふ十年乃光陰を送り今いたや日暮乃を
何らをを色てう英名のるくひぐくぶたやたまくまを雄き
人より受好く大馬と月ぐく移器んも幡きるうと
るひ続けて居〜うるが名より神の尾より松うん後の江の
岸の姫松と雌雄うりと生つる小軍るより歳うく今より
見ざるうこを年ふを色しゝく士卒数十人引つを諸で見
るが小城より希みの名本うそ技術地よりぐうまりて龍の
勢ひのう岩緑の色猛風より寂て城より数百年乃老樹うり
内義先大きゝ感じさまぐくより称美して海〜んとせ〜ぐ



児玉内義允
猪卅郎
久到

不図なつかしき松樹に見諸本に続く謡曲に能う天下に
賞へる名木なり淑精の樹本もそ天下第一の英名あり
然るに我武家の家にすきそ数うべして絶えんすの人もも
もと憐々し孔子親回に聖人そ天下皆是を仰ぎ王莽董
卓に暴逆をして天下之是を知る聖人に及ぶ不にあらじ暴
悪とはしても天下第一の悪人そ是又然あるべき然すと
人ども若と我そ殺さんに勿論なし今此松を伐て捨ん
物なるべ是利家にさる時呼の者あるべ名人そ物の
尾とは松を伐るべ行すべ天下亡双の馬鹿者もそ
へへに日本一の狂人もそ先我名とは海内に弘むべ
不論金きる名に揚るべ雖亡別の狂名と殺せんもそ

西向と米代寺の変を記せ茅と名よせ此名本を伐ん
とは亡率ども大きに驚きこい物狂しき御紛れてはりの
るべ松に住吉の御神殿にめでさせ給ひ御者の松と樹を
伐きなるべ伐て伐とて給で祈り時りと蒙り
人の悪を受世の中の狼藉者と人の謗と受給へ此は
嫌疑と御免用うべくは一日も諸々しい内義先たう
矣ひ日本国の人我と狼藉者と誘んこそ本懐なる海
なる下郎の輩何そ我心中の悪味を知へんや源きに義
てるべるべ力を合せ伐例せときびしく下知へ
免さまに亡率ともきのどるべ是非及ばざしも年
経たる大木と亡所にも切倒ぬ不公儀なるべ本の

児玉内蔵允
高砂の
松を
伐る

伐はよう強くく白気立のぼり空中よりたるびき流り東又引とく住吉の方へ立りゐる内の毛も立く恐ろしきさま内義元の本陣遠さうと心胆びし甚敷風吹帆を巻あけ西とさして走りしが俄雨乃神まで鐵よ函風吹殺雨い篠を乱りごとく電光ひらめき雷鳴耳と貫き山の如き大浪船を揺なげゆり落しあいやは神中の藻屑とるらんと思ひし雑兵ども是ひ恐ろしやと色をらび神本を伐る暫あらばし戦場にて命を失ふんと思て是期のうするしと神罰と変派業の死とるさんすうんがうるしきすとく結一日ゐる夢とと押ふくと泣々れば内義元大きふ驚り恐る雑兵ども天よ不測乃風雲あり

人よ不幸の危難あり九いろ〳〵より海上雑風よ逆ひ船と波く乱もる若若平と幸と義人や豊色塔沖のさうふ小まりく荒るべきや伺る亟用のさう言よ恐止居んより櫓を推立て巳國の波へ船とよせよ櫂や漕よとや知もる命に忽ち風逆浪と揚げ船い矢ようも狂ふく天下無双の大雑洋阿波の鳴戸よ吹落さし激く大浪よ船の四つる風車のごく亟疾乃ごちもるく三日計い暴止ば船中一人として人ゐ地を拾うく赤死よ折側を鄙ごし鮮血と吐き身より脂とるびし用もなてられぬさまこさしもの咒文内義元大きふ労を心と限め天地と拝〳〵我海やよ乱せんるよ恐るく不ばあるびに今若命を乞く石山城へ兵

阿波の鳴戸
雅風

粮を運送し遂ていろ砂表の不用と命らるを其時の言葉も
を人々の耳に海底の藻くずとなるべしと嘆き歎かなり天地
神明我肝心とのいれを一さび年四(時)に成わが君命に背くし
其後人暇切て相果べしと心願をこそし初まぐも死人の風俗の
止まるくいよ〳〵募く吹来るたば内義元今い勢力も衰て
く去年と俗人拡屋に打倒を配を結り外さらはせんと
るうろう

六字名号奇特事

児玉内義元石山城を出て海路如工人今度の働き衆
人城さうと称し結ひ引出物として開山聖人の御真影六
字の名号と結ろうろふ内義元来佛乃祈信とる心

るけをばるとしくもおりく懐中してみるるがなまりの苦しさ
と不図此名号のくりとろひ出海や弥陀佛の御ひうはは逆
十悪の罪人も一念義記称名称唱ふをば宏大恵道の光
明を放ち安楽国に攝取し給ふと安心ぐり弥陀の願誓上人
のる徳海内に流布し信長も数年の合戦に
疲労せるう今く佛恵に遠ひ諸佛の罰と蒙り物ろうん
工人い即弥陀の化身なるまゝ悪魔に引るく我なりとも
るどう見とて結ふ義元と日比の強慢心と翻〳〵彼名号と
元出〳〵拡張小さげ出一心をこ〳〵し念佛数十遍と唱へ名号
と海中へ投のこう不思議なるるる三日三夜小止るうし大
風巨浪忽ちまり海の面うらくうふ鳴ぬ乃波もえぎりうう

内義元是と乃ゝく私淑ふ可き人と投ぜ所なるこゝや如何なる係
る奇端乃如しまた佛祖と稱する心より塵埃のごゝく輕
んゞ惡業をなすの数と考へ今日の危難と思せなき事
偏に佛乃方便なるゝんと信心を感し感涙をむせび々乱風
靜に波穏きまれば士卒ども潮に乘よう石恩儀の命を拾
ひさうと揖義を思し搖を立て人並なく藤州に着陣せう慶
治の川口より私と物うんとしてゝ石に腰の方の為中より
赫くたる光明輝きそふ内義元あ毋と竹揮とのて搖
見るふ嗚呼乃神すて泥めきもし六字の名号揮のよう鎗
殺ひ安然と寝に出現はしてゝ内義元い云ふも及ばず私
中乃士卒皆奇異の思ひと思一日に堂と合せ念佛

称名はしうゝ多いみ雖ゝ国ゝ内義元感涙肝に銘
じ濡る名号と匿に納め玉に登城して石山及びる砂表の
不用調ひし自言はし通ていう嗚呼乃雖風名号の奇特と物
語まば一座の衆中皆信心を發し石山乃門徒皆教義乃
合戦に勝利と拾ふも佛乃恢恵とうゝざふふとのるゝ
んとまゝ恐まる者りに去程小児玉内義元戦場に帰
ゞて三日ゝの夜の夢に有い何國と白浪の荒したる海と其
さまに霊力る白髪乃老翁乃移ひ国扇を立て巳方八
幅と拓き移ゝに異相麗姿の神達数も考へ所いま移ひ
附に彼老翁りゝくの神に向ひ佛も藤州毛利の家臣吳
玉内義元ゝゝ者あゝん慈の名聞に引き神威と犯ー國

児玉
内蒐
夏よ
て

法と既に自ら飛と化することを居候ひるべきの先生の門
弟にて三日の命を備へ今明日の期を及べり弄ぶく報
を引て黄泉の中に紙しめ門人と門人給へ門ろくの祈達令
嚴しく退き給へとなくなるきて爰光さり内義先つらく
爰のさまと撥見るふの声の沖すて國を呼べ切腹して死を
ぶきと撥ひとるせと令ふの保きふつたく其いのいを忘
却せしを似さり祈佛の應驗とるふ余りつり疑あけ
るば我命い絶るべしとくく書る報恩に沐浴して身
を清め聖人の御名号と強よふ掛ぬり端座合掌閉目
て念佛と唱ふるの百遍斗赤雲の空明れに忽然としく
息い絶さり実の奇異の力驚絶るりと語り伝へく感歎に

今も尚聖人の名号を唱ふ玉家の伝へく撰御の名号と称し
ぬるい見るりと中伝へ

毛利家の使来

藝州廣島の大守毛利右馬頭輝元本願寺へ兵粮と入合
戦を挑るの其間るきふあ〜に抑毛利の先祖と易るり
平城天皇の末流大江中納言匡房の後因幡守廣元の後
亂たり輝元の祖父大膳亮元就い勢ひるき英雄之代く
藝州毛利の荘を領とる氏を毛利と号に実の防
州岩國の大守大内義隆と出雲尼子の修理
亮晴久互の威勢と爭ひ合戦止没し其に毛利
元就い尼子晴久の味方の系大内方の大将西条蔵山

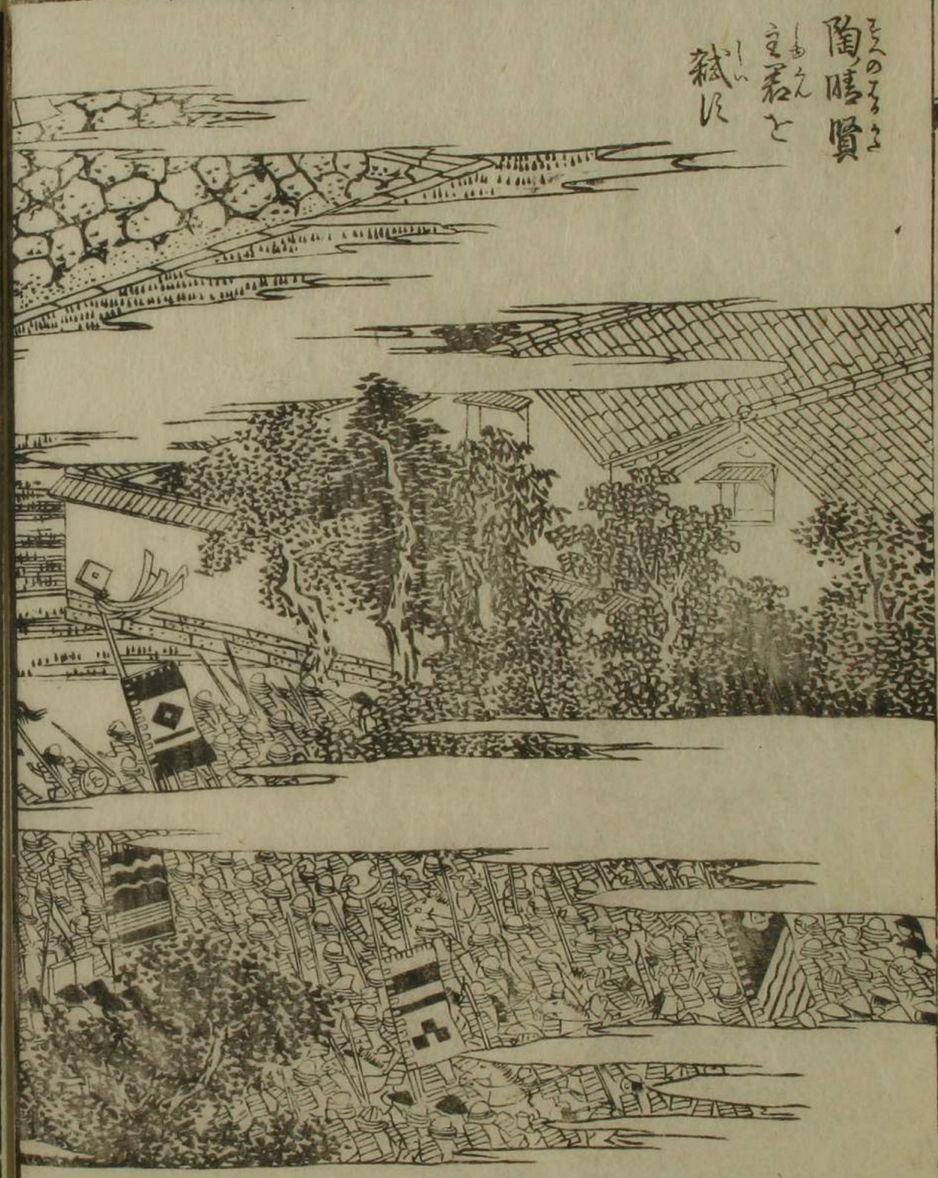
の城を亮田備中守を責て其城を奈良備後の城を武田治部少輔と般若谷の横戰〳〵數百級の首を得て近藤に威を振ふ武田大きゝ怒を緣とりゝめて尼子家滅ぶむる尼子晴久武田の荷擔し毛利を拒む色よりて元就心中の尼子と賺〳〵大内義隆の味方し〳〵尼子家うの歎對に義隆嘉んぐ元就の懇切を感し其子義長郎の若と元服せ〳〵め義隆の一字を讓り毛利彼中守隆元と名け一族内義ゞ女をもて隆元の妻に色よう元就義隆が親族の内の別り威指いよ〳〵嬢〳〵自分の武略をもて尼子一家滅亡さんとに尼子晴久は大きゝ小勢り藝州に乱入〳〵元就と對戰に元就計略をもて歎と討の度〳〵も尼子い七万余騎の大軍絶て全き勝利みべりうざるを知り大内義隆の加勢と元義隆郎家長陶又郎隆房と大ゐとし數万騎の大軍を配元就の力を添ふる家の抑ひて七万勢大きゝ戰ひ晴久ゝ一族尼子下野守出先の進と辯と勇と働と[illegible]し大内ゞ先鋒の大ゐ源中宮川名紀討元元就隆房の去大ゐと退ちうでけ其ゝ[illegible]し[illegible]て討死に其敵ようと大雪ゐと塞ぎ合戰も優〳〵雖く晴久絶の軍勢を引とげ雲州へ陣〳〵ゐる大内義隆い此級軍を勢ゐ〳〵天文十一年大軍を隆し雲州富田の城を責む統ゐとく兵糧の運送心のようせば大内方再び級軍し防州の陣せう統ゐ小大内ゞ家長陶尾張守隆賢とつの者あり義隆を眼むるゝみゝく忽三代の若恩

大内
尼子
合戦

を惡まし叛逆と企て多勢の軍兵を率し防州山口に大内義隆
が居城へ押寄せり義隆は西國九州の管領として後二條大納
言を住せられ冨美榮耀を誇り岩を詩歌管絃とうて樂び
此日も一族大友義鎮が使者を招待し猿樂を催し招待の
其中へ陶晴賢大軍をれて八方より元囲を短兵急に攻落
さんが義隆防ぐ力無て其日は山口の城を没落せしが終に
天文十八年九月朔日長門國府川の底大寧寺に押ひく
自害して陶晴賢ろへ使を若を戮し自立とゝべき志なれた
人心乃是が元を恐まく其月發と刑名と金薑と改め
大友義鎮が弟義長とむ入く大内の名跡を立させ自身
後見とゝ成く國政を執行ふ毛利元就い義隆が亡命を怨
み陶が弑逆乃罪をとう人人数と催し合戰に及ぶの数度に
附て弘治元年十月藝州嚴島に押ひく大きに小戰ひ元就
忽陶が軍を切崩し終に全薑を敗しく大内義隆が眼を
敗して自刃しよう後い元就が威海内に振ひ偏に領中し
守護元其外元春隆景皆父に劣ぬ名將なれい是迄の
國人其威風を畏こ石州の吉見攝州の浦上備前の宇
喜多伊豫乃河野を始めとし野州東濃に斎藤毛
利の幕下に屬し今い雲州乃尼子一家のみ以て立若と
見へうう就る小永禄三年十二月尼子晴久死去其子
義久家督を継とうとも若年にて武勇に拙く元就其
虎に案し大軍を候し雲州を責るの甚急に附て元就が偏

る渡元寛の弟に其いる右馬頭輝元十三歳嫡孫なれば毛
を元就が家督と定む毛より後元就年〻兵を雲州より
入交戦文を止めし永禄十一年尼子義久富田の城
よみ〻く兵勢強力なる〻其弟秀久倫久と俱に毛利へ
降参し一石懸命の地と毛勢州吉田に蟄居し故に元
就尼子が旧国悉く我有となし今十三州の国主と仰ぎ
剃髪平孝寺殊如上人の喚導を仰て正親町院御即位の料
を調進し菊相の御級と免許あり位階三品に昇り官
位大膳亮を兼陸奥守に任ぜらるゝ宮方人其下風を慕ひ
つゝ帰る元就さゝば西海に渡りて九州を征伐せんと考後
考前の地と働く所にて高橋左郎統種とはじめとし国

人数多毛利の幕下に降人往ふ九州に押ひくもりて之人数
いに大友義鎮の〻之毛とも討死さんの雑きよりつゝ〻と尼子
先元尼子の家士山中鹿之介幸盛と云者あり天性智
謀深く仁勇と兼備へ大力の業の武士にて武義防弗芳
再来之と称せらる元来鹿之介忠義絶倫の士なれば尼子の
滅亡を嘆いふしして彼家の再興せんと京都東福寺に
尼子の庶子の僧と称して剃髪せし尼子勝久と名のゝせ大将と仰き藩代忠義の浪人を徳とすゝふ
鹿之介が武勇に誘いまし片彼所にひそ〻隠まし尼子の浪
人数もくと集りて雲震のごくありて鹿之介大に
勢ひ永禄十二年の冬出軍を引く雲州へ発向し富田の


陶晴賢
主君を
弑し

然に毛利元就のねたみ深く憎しうして只一息の責落し勢
遠近に振へ渡りて雲州の地を平靡かせ威を海西
毛利元就は時を後の國にありて此のうちに大きに強き山
中鹿之介は双の勇士なり国の歌にあり九國
と打もて藝州へ帰陣し輝元義元隆景等と大なる敵
方の大軍を率し雲州に向いしめ鹿之介と合戦仕鹿之介も
毛ぞ尾の怒歌を聞の仇と数ぜんとみ奥百計粉骨して
戦へば此方は元義隆景の智謀機慮変の術をめぐし
碎き国を奪へ戦へさしば双方互角なる勝あるひは敗
なくも三年の責秋と経へ時に元亀二年夏六月毛利元
就行年七十又厳島に吉田の城に逝去せし輝元家

智に希なる元義隆景左右の強足にして元就亡世の時に者共
民を保んじ国を治むさしども山中鹿之介は元就死後の大
敵なれば其の侵に備へ十州の軍兵を弘儲し
勝久鹿之介を責るに国隙に鹿之介勇士ども元
来反勢強に集り軍勢なれば終に精力尽き勝
久も鹿之介も共に都へ上り明智光秀に付て信
長に幕下に属し小田の力を借て毛利一家を亡さんと信
長も又鹿之介が智謀勇略世の人傑なる紙敷に見る
の余業を落ひ毛利を討ん計略して鹿之介に郷
に国を与へさしば毛利家よりも信長を亡さん侵に鹿之
介と討んと謀り備こそ石山本願寺に力をたをけ居如

上人と一味〳〵て上洛の企さまゞかりなるに不謂あ所
なりしぬや

繪本拾遺信長記後篇卷之一終